

## 書 評

Furth, H. G. *Piaget and Knowledge*.  
1969 Prentice-Hall

この本は J. Piaget の発生認識論への入門書である。入門書とはいっても、程度を低くした単なる解説書というわけでは決してない。Piaget 理論を深く理解するための本格的な理論的入門書である。日本では、米国と同様、Piaget は仏語の原著ではなく、翻訳によって読まれることが多いと考えられる。この本が出たことによって、英語で Piaget 理論の展望を得ることができるようになったことはたいへん喜ばしい。狭い意味での Piaget の「心理学」に興味を持つ人にとっては、その広大な背景を知るために有益であろうし、また、哲学とくに認識論、および生物学との関連における心理学の位置づけに興味を持つ人にとっても欠かすことのできない貴重な文献となるであろう。この本は、あくまで心理学者を対象として書かれたものではあるが、心理学の枠を超えて広く歓迎される著作となるであろう。

この本の性格は、すでに広く知られている Flavell J. H. 1963 *The developmental psychology of Jean Piaget*. Van Nostrand と対比させると説明しやすい。Flavell の本は Piaget とそのグループによって発見された膨大な心理学的実験的事実についての紹介と解説が具体的に詳しくなされており、Piaget 心理学ハンドブックといった趣があった。その反面、理論的側面についての批判的敘述は不充分であるとの評が従来多くなされていた。こんどのこの Furth の本は、いわば Flavell の本に欠けていた点を補ったものといえる。そのちがいはたとえば次のような諸点に見られる。すなわち、Flavell においては具体的事実そのものの説明あるいは引用が詳しくなされていた。Furth においては、具体的な実験的事実は最少限に留め、というよりはむしろそれを前提として、Piaget 理論の中心的概念および理論的方向づけの批判的分析にその主力が向けられている。従って、Flavell のは文献総覧的なところがあり、参考文献の網的であることを特徴としていたが、Furth は論点に直接に関連する少数の文献しか言及していない。さらに、Flavell は正確を期するための直接的引用を多く用いていたが、Furth には、すべて Furth 自身が一旦消化した上で、Furth 自身のことばに言いかえるという努力をしている。そればかりでなく、Furth は、以下で見るように、Piaget がこれまで定義なしにあいまいに用いてきた術語を批判的に明瞭化し定義するという仕事をしている。さらに進んで、米国でみられる Piaget 理論に対するさまざまな誤解を指摘し、これを正そうという試みをもしているのである。Flavell のものが Piaget 学派が集積した実験的事実へのすぐれた導入であったとすれば、Furth のものは、Piaget 理論へのそれにおとらぬすぐれた導入である、ということができよう。

さて、内容の構成であるが、全7章からなり、導入の序章と要約の終章を除くと次の諸章からなる。すなわち、操作的認識 (Operative knowing)、シンボリック

識、形象的認識 (Figurative knowing)、生物学と知識、発達と学習である。各章で節としてとりあげられているトピックスは、感覚運動的知能、操作的知能、シンボル行動、コトバと言語行動、知覚とイメージ、記憶、知能への生物学的接近、適応と知識、進化における知識、均衡化と発達、学習と知能、などとなっている。以上の諸章に加えて、Piaget, Inhelder, Furth らによる論文やその抄訳が Reading として加えられて本文の展開を補っている。とくに Piaget の論文の中には Furth が今回はじめて英訳したごく最近のものが含まれており、英語人にとっては貴重である。それから見落してならないのは、巻末に Furth による語彙表が加えられていることである。ここには、Furth が明確化した術語が整理収録されており、Piaget 理論を学ぶ上でたいへん便利であると思われる。

さて、以下順を追っていくつか問題とされている点を拾ってみることにしよう。

Furth は本書の前半で Piaget 理論の中心概念、たとえば、同化と調節、操作などの諸概念に触れながら、理論を解説している。注目すべきは、仏語の "schème" と "schéma" の区別を英語でも "scheme" と "schema" として区別すべきことを指摘しそれを実行している点である。Piaget の理論によれば、認識の中に二つの側面が区別される。すなわち、現実にもたらさるこれを變形する動的な活動にかかわる操作的 (Operative) 側面と、現実の静的な布置の表現にかかわる形象的 (Figurative) 側面とである。前者にかかわるのが Scheme であり、後者にかかわるのが Schema である。さまざまな Scheme は互いに階層的構造をなし、操作 (Operation) はもとも一般的な Scheme である。さて、この区別は、Furth によれば、Piaget の原著ではなされているにもかかわらず、従来の英訳書ではなされていなかったという。かつて Flavell が指摘したように、Schème にしても Schéma にしても Piaget 自身が明示的な定義をもとと与えていなかったとすれば、Furth のこの明確化は、理論の中心に触れる一点だけに、たいへん貴重な指摘だと思われる。

Furth は、操作的認識と形象的認識という次元は Piaget が認識を分析する際の主軸の一つであるとする。たとえば、知覚、イメージ、物の形の記憶などは、普通は形象的認識であると考えられやすい。しかし、Piaget の「急進的構成主義」は、これらの過程における操作的側面の存在を指摘する。Piaget らのイメージや記憶に関する最近の実験的諸研究は、まさにこの点に向けられている。たとえば、Piaget (1968) はこの点について要約して述べている。Neisser (1967) の利用仮説 (Utilization Hypothesis) もこれと方向を同じくするといつてよいであろう。

上の点と関連して、Piaget の操作的知識の理論の独自性のあらわれとして Furth は次の点を挙げている。それは、他の認識理論あるいは認識心理学と異なって、Piaget 理論では媒介的表象 (mediational representation) が理論の本質的な構成要素とはなっていない、と

いう点である。この問題に関して、Furth の一論文が Reading として特に収録されている。

シンボリック認識もまた操作的側面と象徴的側面を共に多く含んでいる。しかし、Piaget の立場からは、象徴のもつ操作性 (Operativity) がとくに強調される。この立場を端的に説明するのに、Furth は次のような一連の定式化を提出している。"Symbols represent the known event." これは Piaget の立場である。この "known" というところに Symbol と操作的認識の関係が表現されている。これに対し、"Symbols represent the external event." とすれば、これは Piaget の理論からずっと遠ざかり、さらに、"The external world is represented by symbols." あるいはさらに "The external world is known through symbols." とすれば、Piaget 理論と正反対の立場に立つことになるというわけである。

シンボルと関連して、言語と思考の章は特に面白い。Piaget は、言語行動を、その独自性を認めながらも、他のシンボル行動と同一の文脈において見るべきことを強調する。そして、言語行動が操作的構造に依存しているのであって、その逆ではないことを強く主張する。Furth も彼自身の行なった聾児についての研究によって Piaget の立場を支持している。この点については、Bruner ほか (1966) の言語が操作形成の必要条件であるとする立場とは Piaget は真向から対立するわけである。ここで Piaget (1967, 1968) における激しい Bruner 批判が思い起される。また、ソビエトのガリペリン (1968) の人間の思考を言語の内言化とする立場も、Piaget とはやはり対立しているようである。こうして、この問題は、いまだにいわばホットな接点の一つであるといつてよい。この問題についての Piaget 自身の論文が英訳され Reading として加えられており、貴重な一章となっている。そのほか、internalization と interiorization の区別、formal abstraction と physical abstraction の区別など Furth による明確化はたいへん適確である。

さて次に、本書の後半では、Piaget 理論をより広い関連において位置づける試みがなされている。

Piaget 理論と生物学との関連については、Furth は K. Lorenz の仕事と Piaget を関連づけながら、Piaget が知的行為を適応行動の一つとして進化という文脈の中にいかに位置づけているか、を解説している。Furth は Piaget の仕事を「知能革命」と呼び、他の三つの革命と対照させている。Copernicus の革命は地球と太陽をより大きな宇宙全体の中に位置づけ、Darwin の革命は人間をより大きな生物全体の中に位置づけ、そして、Freud の革命は理性を行動の動機の中に位置づけた。Furth はいう。「Piaget の革命は、知識と知能を哲学的仮定と思弁から解放し、自然の生物生活全体の中に位置づけたのだ」と。

Piaget 理論と認識論の関連については、特に Piaget が、一方では先験主義の哲学に反対し、他方では実証主義的機械論的科学に反対していることを指摘している。Furth はこの指摘によって、Piaget の「急進的構成主義」あるいは「相互作用主義」の立場を明らかにしているわけである。Piaget のこの立場からすれば、それに対

して反応することができる生物が全く存在しないような、そういう外界の事象について云々することは無意味であるということになる。知識の「客観性」の問題について、Piaget は「客観性は操作の協調によって構成される」という立場をとる。Piaget のこのような立場に対しては、すでにルビンシュティンの鋭い批判 (1960 上, p. 72 及び p. 138 : 1962 p. 33) がある。Furth のこの書物を読んでも Piaget はルビンシュティンの認識論的な批判にまだ答えられていないという印象が強い。あるいは、Piaget は常に「心理学者としては」という立場を堅持していると考えべきなのかもしれない。Inhelder は本書の中で Piaget のソビエト訪問の際の「Piaget は観念論者か？」問答を紹介している。この問答も、Piaget の「心理学者としては」という立場を浮かび上がらせているようである。

均衡化と学習の関連、とくに、特殊内容は学習に結びついているが、一般化可能な形式は均衡化と結合しているとする章は、獲得過程をすべて狭義の学習に帰着させる経験論的学習理論に対する批判としてたいへん興味深い。

さらに、巻末には Piaget の自伝が加えられていて、Piaget 理論の背景を簡潔に知ることができる。

著者 Furth は、Furth, H. G. 1966. *Thinking without language: psychological implications of deafness*. Free Press の著者でもある。Geneva の発生認識論センターで一年間研究し、本書はその成果の一つでもある。

本書が現在の米国で出版されることの意義はたいへん大きいと思われる。Piaget は今や米国で一つのブームを迎えている。このことは、Bruner ほか (1966), Sigel & Hooper (ed.) (1968), Elkind & Flavell (ed.) (1969) など、Piaget の業績をたたえる書物が次々と出版され、また Piaget 的実験研究が続々発表されていることから分る。さらに、今年春の AERA (アメリカ教育研究者学会) の Los Angeles 大会で、Piaget と Inhelder が賞を贈られたことでもわかる。しかし、行動主義と経験論的認識論が強い米国で、Piaget が理論的に正しく理解されて受け入れられているかということになると、これははなはだ疑がましい。ねんどを丸めれば「ああ Piaget か」といった具合の皮相な理解が横行していないとはいえない。このような状況をふまえて、本書が Piaget 理論の正しい理解を深めるための入門書として、アメリカ人の手によって書かれたのである。本書の果しうる役割は非常に大きいといわなければならない。歯に衣をきせず毒舌を吐く Piaget が、この Furth の本についてはよほど満足したとみえて、序文で "excellent", "admirably", "remarkably successful", "unquestionably clarified" などと最大級の賛辞を贈っている。Piaget 理論についてすでによく知る人々にとっても一読に値するものを充分もっている書であると考える。

#### 文 献

- Bruner, J. S. 1966 *Studies in cognitive growth*. Wiley.  
Elkind, D. & Flavell, J. H. (eds.) 1969 *Studies in*

- cognitive development*. Oxford Univ. Press  
 ガルペリン, ペー・カー・1968 内言の問題によせて。  
 児言研国語 1. 42—49 (天野清訳)  
 Neisser, U. 1967 *Cognitive psychology*. Appleton-Century-Crofts.  
 Piaget, J. 1967 Cognitions and conservations. *Contemporary Psycho.* 12. 11. 523—532—533.  
 Piaget, J. 1968 *On the development of memory and identity*. Clark Univ. Press.  
 ルビンシュティン, エス・エリ 1960 存在と意識 青木書店 (寺沢恒信訳)  
 ルビンシュティン・エス・エリ 1962 思考心理学 明治図書 (石田幸平訳)  
 Sigel, I. E. & Hooper, F. H. (eds.) 1968 *Logical thinking in children*. Holt Rinehart Winston.  
 (お茶の水女子大学 吉田章宏)

Long, N. J., Morse, W. C. and Newman, R. G. (eds.)

**Conflict in the Classroom :**  
**The Education of Emotionally Disturbed Children.**  
 1965  
 Wordsworth Publishing, Inc. Belmont, California.  
 pp. 515

精神衛生の原理と学級における教師の実践との間にあるみぞをいかに橋わたすかという問題は過去においてもしばしば論じられてきた。学級における情緒障害児 (emotionally disturbed children) のための特別学校計画と精神衛生の問題をいかに統合するかは今日においても依然として未解決の重要課題の一つである。我国で近年その数を増していくといわれる登校拒否児童の問題もこれと決して無関係ではあるまい。

米国においては1964年頃から政府がこの問題にとりくむ特別な教師の養成と研究に力を入れ始めており、例えばこの年3月には、特殊児童のための委員会 (Council for Children with Children) の中に特に Children with Behavior Disorder と名づけられる分科会が設置されている。そしてこのような情勢のもとに情緒障害児の治療と教育についての関心が急速にたかまることになった。その結果、この問題に関する教育計画の改善に、教師、心理学者、教育行政面における関係者が積極的に参加するようになった。ちなみに、1964年をさかいにしてそれより10年前にはこの問題についての教師を養成するための大学院コースを設置している大学はわずかに5校にすぎなかったのが、1965年夏学期にはこれが一挙に68校に増加している。一方、現場においても情緒障害児のための特別学級が、公立学校に設置されるようになった。

さて、「学級における葛藤—情緒障害児の教育」と題する本書はこのような背景のもとに1965年に N. J. Long (Hillcrest Children's Center, Washington, D. C.), W. C. Morse (University of Michigan), R. G. Newman (School Research Project, Washington School of Psychiatry) の編で出版された。出版年度からいえば

最新刊書ではないが、1968年には第7版が出ており、内容的鮮度も十分に保たれていると思ひ、ここにとりあげて紹介する次第である。

本書の序文で編者は、特別学級の拡充に伴うものとして次のような問題を提起している。即ち

1. どのようなこどもが特別学級にうけいられるか。
2. 教師にはどのようなタイプの訓練が必要とされるか。
3. どのようなスーパービジョンをうけるべきか。
4. どのようなタイプのカリキュラムが必要か。
5. 治療ということの役割は何であるべきか。

そしてこれらに答えるための新しいプログラムは今までの精神医学的公式にあてはまらないもので、これに代るものとして、special teacher を含む教育者、school psychologist, visiting teacher, social worker 等が責任をひきうけるべきだとしている。編者の基本的な立場は「心理教育的接近」(psychoeducational approach) とよばれるもので Long 等の言葉をかりれば、この立場に立つとき、「教師は集団における教師の役割、集団圧力のダイナミックス、個人の心理学、等と同様に、基本的な発達と成長の原理について理解していなければならない。さらに教師は、治療的熟練 (remedial skill) をもつことが必要で、同時に児童の表面にあらわれる行動をいかに現実的に処理するかについて知らなければならない」ということになる。つまり本書のねらいの1つは、臨床科学の立場から情緒障害児をかかえてとまどっている現場の教師達へ実際的な手段を提出することにあるといえるだろう。

さて、次に本書の全体の構成についてそのあらましを述べてみよう。

本書は全体で8部からなり臨床の分野では名の知られている A. Freud, Bühler, Coleman 等を初めとして約60名が執筆している。

第1部は情緒障害とよばれている状態で体験されていることの意味内容を問題にしている。この第1部の著しい特徴は、文学作品22編から子どもの問題行動を含む記述を引用し、その作品に登場する子どもの体験を情緒障害の観点から分析し、各引用ごとに、診断をあたえ、これについて討論を加えるという形式をとっている点である。例えば、チエホフの作品からの引用の診断には、DIAGNOSIS: childhood trauma caused by parental insensitivity to children's feeling, identifications, and projections. とあり、またサマーセット・モームの「人間の絆」からの引用には、DIAGNOSIS: Withdrawal because of physical handicap—use of handicap to foster neurosis, masochism. といった具合である。このように文学作品の引用により登場人物の具体的行動例を分析するという導入形式で本書が始まっているため、この種の書によくありがちな専門用語の羅列による抽象的な説明と無味乾燥な記述の弊におちいることなく、まず本書を誰れにも近ずきやすいものにしていく。

第2部は、いかにして情緒障害児を見出すかという診断の問題があつかわれている。ここでは、Lambert, Bühler, Hollister, Shapiro 等が screening と診断に